平成23年11月バス例会

美作の中世山城を訪ねる

― 備後福田氏の足跡を辿る ―

（医王山城を岩尾寺側から望む）

備陽史探訪の会

講師　　木下　和司（城郭部会評議員）

坂本　敏夫（城郭部会長）

11月度バス例会スケジュール

① 7:45　福山駅北口集合

② 8:00　福山駅北口出発

③ 8:20　福山東インター到着　・・・　山陽自動車道へ

④ 9:40　真庭 SA 到着　・・・　トイレ休憩

⑤ 10:10　津山インター到着

⑥ 10:50　岩尾寺到着

⑦ 11:30　医王山城山頂到着　・・・　昼食

⑧ 12:30　医王山城山頂出発

⑨ 13:00　岩尾寺到着

⑩ 13:40　津山洋学博物館到着　・・・トイレ有

⑪ 14:40　津山洋学博物館出発

⑫ 15:00　誕生寺到着　・・・トイレ有

⑬ 15:30　誕生寺出発

⑭ 15:50　院庄館跡到着　・・・トイレ有

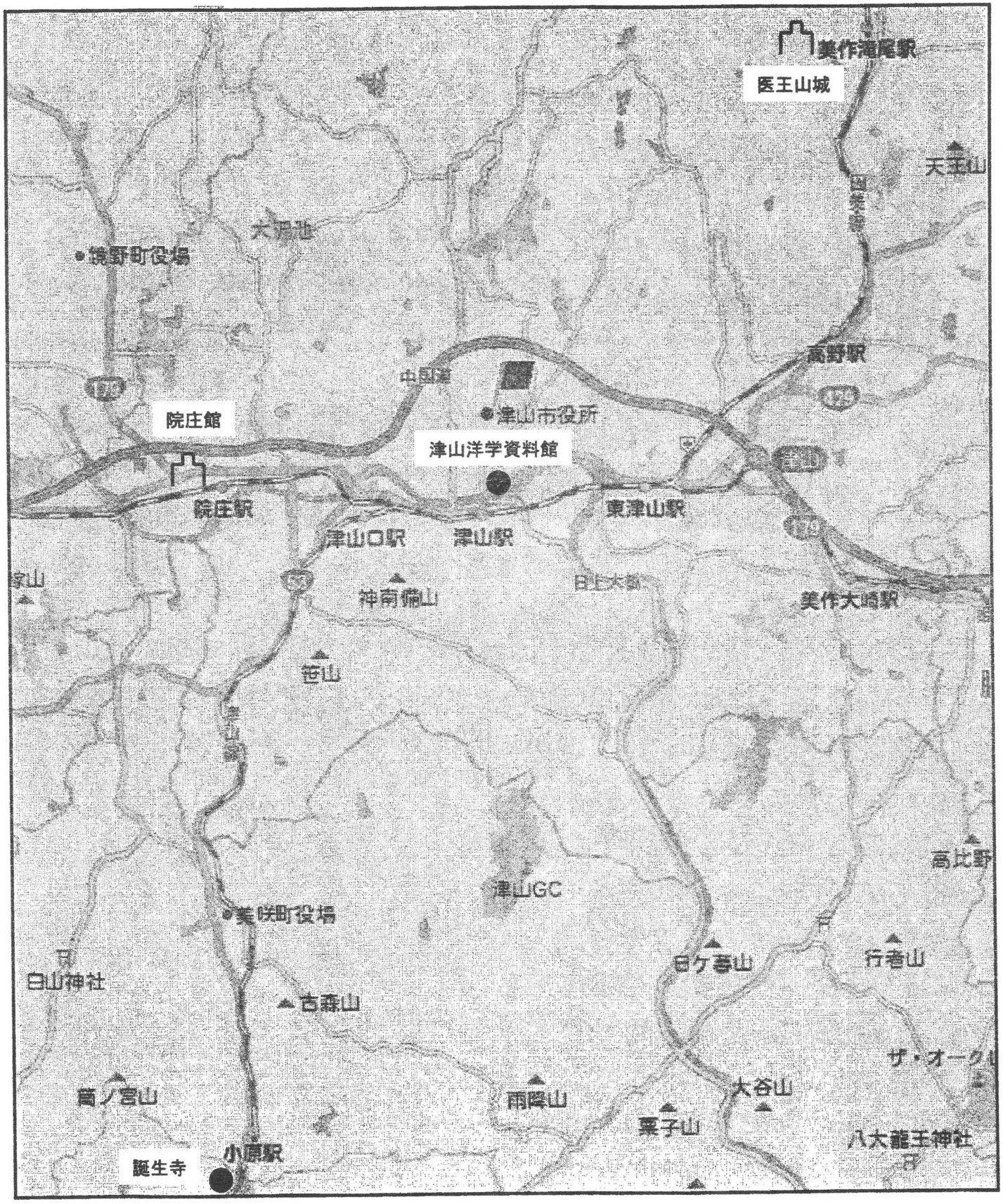
⑮ 16:10　院庄館跡出発　・・・院庄インターから中国道へ

⑯ 17:30　道口 SA 到着　・・・　トイレ休憩

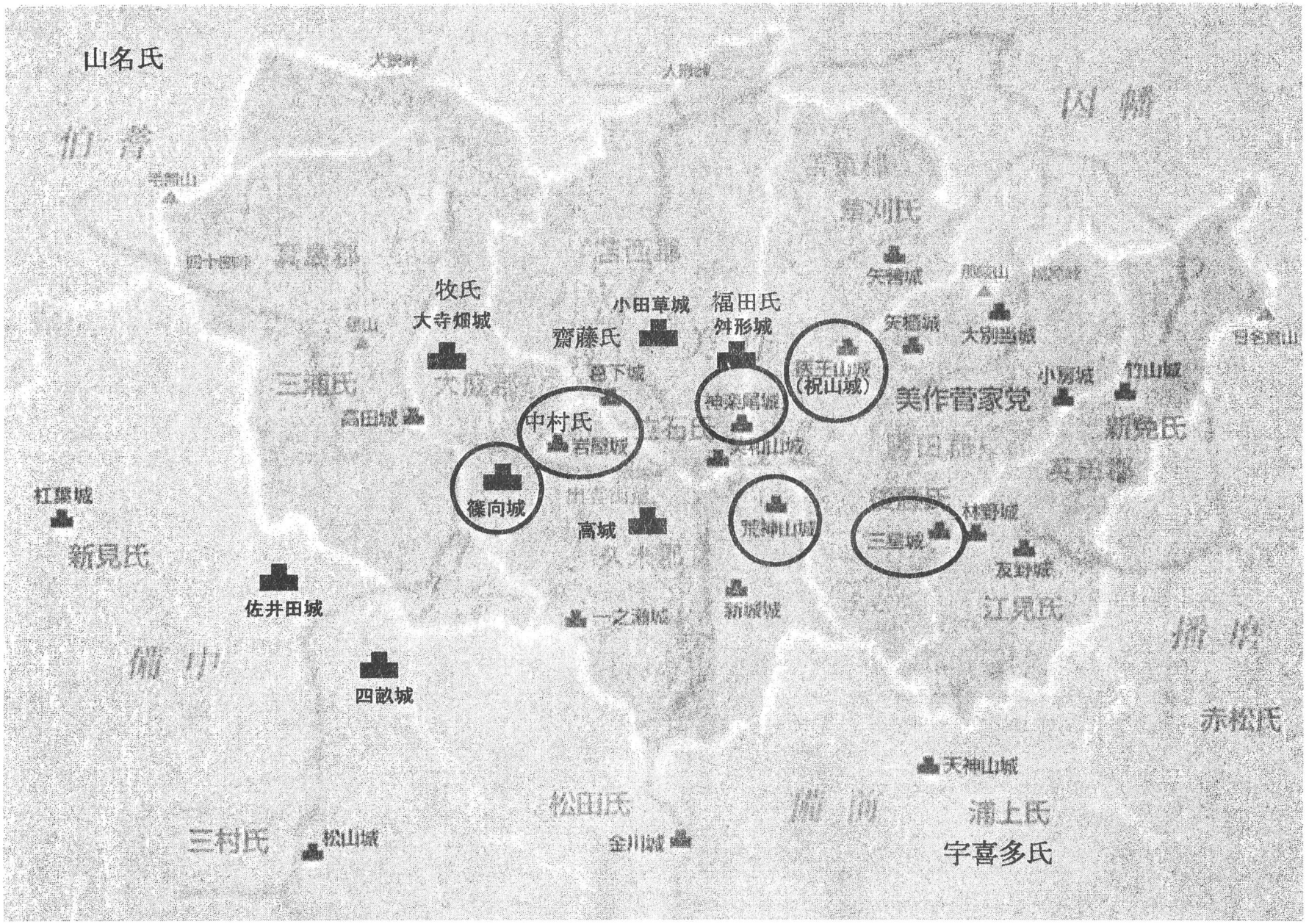
⑰ 17:50　福山東インター出発

⑱ 18:20　福山駅北口到着

美作の中世山城を訪ねる　主な探訪地



美作の国中世山城と国人



【バス例会】

美作の中世山城を訪ねる

―　備後福田氏の足跡を辿る　―

【主な探訪地】

1　医王山城（津山市吉見）

●別名　祝山城、岩尾山城　●標高三四〇ｍ、比高一九〇ｍ

津山から鳥取に至るＪＲ因美線美作瀧尾駅の北西に高くそびえる山塊が医王山城である。城は東に加茂川が流れ、北の峰続きは堀切で画され、南端部にも同様の堀切がある。しかも西には深い谷が入り込んで、まさに天然の要害に立地している。

永禄九（一五六六）年に出雲の富田城は毛利氏によって落城し、尼子氏は滅んだ。そして天正年間（一五七三―九二）に入って、美作は毛利氏と宇喜多氏が対峙することとなった。この時、医王山城は毛利方に属していて、桝形城主福田盛雅が預かり、毛利輝元は在番衆として湯原春綱を送っていた。天正八（一五八〇）年に宇喜多氏は医王山城を攻撃したが、湯原春綱・小川元政・塩屋元真は宇喜多方への内通者を出しながらも三の丸を死守し、籠城したといわれている。このため宇喜多氏は撤退した。しかし、天正十年に毛利氏と羽柴秀吉の和議により、美作は宇喜多領に属することとなった。ほどなく本城も開城したものと思われる。

この城は東北に大手をとり、南を搦め手とした連郭式の山城である。北の峰続きを遮断する堀切は坊主越しと呼ばれる。本丸は曲輪の最北端に位置し、堀切方向から長さ一三ｍ、最大五ｍの通路的な郭を抜けて最初に到達する郭である。本丸は南北二〇ｍ、東西一二ｍの平坦地を残し、その西辺部に基底部三・五ｍ、郭内での高さ一・二ｍの土塁に石垣を継ぎ足した一種独特の防塁を構築している。この部分での石塁部の長さは五・五ｍである。そして北小口部の石塁面は石組みの表面をきれいにそろえている。一方、北辺部はこれまた同規模な石塁を延長七・五ｍばかり構築している。この二本の防塁は交差するように設けられ、幅二・五ｍ間隔の門構えとなっている。また、北辺の石塁に続く郭線の斜面の一部に石塁を使用している。

本丸と次の西郭とは一〇ｍ弱の段差を持ち、次の郭への道は門の跡を出て西の帯郭を通じて行動する構えとなっている。また、本丸の東に張出した斜面下には、現在、観音堂が建立されているが、この間に堀切を境として上方に二つの郭を築いている。

二の丸は南北三五ｍ、東西六ｍの狭長な郭の東辺に高さ約一ｍばかりの土塁を残しているものと推定される。

二の丸の推定地と三の丸の間には長方形を基本とした狭長な郭によって結ばれている。三の丸は南北一五ｍ、東西最大幅一〇ｍで、北先端辺には三ｍばかりを残す敷地の構えである。郭内は平坦であるが、西郭線から北郭線にかけては基底部幅四ｍ、高さ一・五ｍの土塁を築いて防備を固めている。また反対の東郭線の斜面部には石垣を積んでいる。この石垣がよく遺存しているのは東南角であって、ここでは幅四ｍ、高さ二ｍ余りの石組みが認められる。郭内で注目されるのは郭南端部から五ｍ内側に、幅約一ｍ、高さ〇・五ｍの複数の石を使用した石列が認められることである。現在、三の丸一帯は女竹が所狭しと繁茂している。そして三の丸の北には五ｍ×五ｍの小郭を付設させ、西斜面は中央部から南端の堀切に至る腰曲輪を築いている。

三の丸の南に続く二つの郭は南北九ｍ、東西一〇ｍばかりのほぼ同規模の郭である。南端は一〇ｍばかりの高さを持ち、尾根を切断する上面幅四ｍ、深さ二ｍの堀切を設けている。

この城は、その堅固な石塁に象徴されるように、石を多用している点にその特色があるといえよう。

2　津山市城東地区

①　箕作阮甫旧宅

津山藩医箕作貞固（三代丈庵）の第三子として美作国西新町（後に津山東町、現在の岡山県津山市西新町）に生まれる。医家としての箕作は、

阮甫の曾祖父貞辨（初代丈庵）からで、西新町に住み開業した。父貞固の代になり天明二（一七八二）年十月二十四日津山藩主松平家の「御医師並」に召し出されて十人扶持をもって町医者から藩医に取り立てられた。阮甫は四歳で父をなくし、十二歳で兄・豊順をなくして、家督を相続することになる。藩の永田敬蔵（桐陰）・小島廣厚（天楽）から儒学を学ぶ一方、文化十三（一八一六）年には京都に出て、竹中文輔のもとで三カ年間医術習得にはげんだ。

文政二（一八一九）年には、修業を終えて京都から帰り、本町三丁目で開業、翌年「大村とね」と結婚した。やがて高五十石御小姓組御匙代にすすみ、文政六年には、藩主の供で江戸に行き、宇田川玄真の門に入り、以後洋学の研鑽を重ねる。

② 津山洋学資料館

津山を中心とする美作地域は、江戸時代後期から明治初期にかけて優れた洋学者を輩出したことで知られている。そうした洋学者たちの調査、研究機関として、国指定史跡箕作阮甫旧宅の隣地に、展示内容を一新して新館を建築移転した。杉田玄白らの翻訳した『解体新書』、山脇東洋の腑分けの記録『蔵志』、宇田川玄隋が翻訳刊行した日本最初の西洋内科学書『西説内科撰要』他、ベストセラー医学書『医範提要』、本格的植物学書『植物啓原』などを展示している。

3 院庄館（津山市院庄）

津山市街地の西には吉井川によって形成された南北に延びる平野が広がっている。この地は古代から山陽と山陰を結ぶ交通の要衝に当たっており、吉井川沿いに北上して中国山地の人形峠を越えれば因幡国に、また久世・勝山を通って新庄を越えれば出雲東部に達する。院庄館跡は、こうした内陸交通路の拠点になる位置に立地している。この院庄館跡は鎌倉期から室町期にかけて美作守護職の居館と推定される遺跡である。

『太平記』によれば、正慶元（一三三二）年に元弘の変に敗れた後醍醐天皇が隠岐に配流される際、院庄の庭に児島高徳が秘かに潜入して桜樹を削って「天獏空勾践。時非無范蠡」（天、勾践を空しゅうすること莫れ、時に范蠡無きにしも非ず）の十文字の詩を記した伝承の地としても有名である。

館跡の現状は大半は作楽神社の社地となっている。そして周辺部の西・北・東の三方は延長五百mにわたって幅五・三～一・四mの土塁が残存している。しかし南辺部は西北からの河道のために削られ、館跡の一部は消失している。また土塁周辺は堀が掘られている。この堀は明治二年に建立された作楽神社の整備作業として第二次世界大戦末期から戦後にかけて掘られたものである。

昭和四十八年に津山市教育委員会が館跡整備の基本資料を探る目的で館内の土塁を一部切断する発掘調査を行った。その結果、館跡内の井戸と掘立柱建物柱穴を検出した。井戸跡は、神社東南の広場で検出された。掘り方は二・二m×二・四mの隅丸方形を基本とし、二か所の長方形の突出部を持った不整形なものである。井戸上部は口径六〇cmで河原石による円形の枠組みを行っている。深さはマイナス一・三mまでは確認され、以下は後の保存を考えて埋め戻された。しかし、検出面からマイナス一mの部位で厚さ約二cm、幅一〇cm、長さ約八〇cmの板材で方形の枠組みを行っていたことがうかがえた。

井戸からの出土遺物は勝間田焼甕、備前焼甕、土師質擂鉢、土鍋、墨書木片、箸状木製品などがみられる。これらの遺物から井戸の廃絶時期は鎌倉末期に比定される。

また土塁の調査では、一部中世以降に構築された箇所もみとめられたが、大部分は鎌倉期かそれ以降であって、館の存続期に構築したものであることが判明した。

さらに周辺部の切絵図を検討する調査では、史跡地以外の北・西側に「御館」の字名があり、東側には「御館掘り」「掘り」などの字名が指摘されている。

こうした調査で院庄館跡は条里の一坪を基本として構築されているが、それを上回る大規模な屋敷地であったことが知られた。

井戸以外の出土物の中で注目されるものは青磁・古銭（熙寧元宝）・鉄

鏃・墨書青磁などがあげられる。
また、院庄城（院庄構城）も本館跡の南約六百mの地点にあり、JR姫新線の工事により大規模に破壊されているが、いま、比高二mの高まりをなして一部残存している。

4　誕生寺（久米郡久米南町誕生寺）

①　誕生寺縁起

誕生寺は、浄土宗他力念仏門の開祖、法然上人降誕の聖地、建久四年（一一九三）法力房蓮生（熊谷直実）が、師法然上人の命を奉じこの地に来て、上人誕生の旧邸を寺院に改めたものである。本堂須弥壇の位置は上人誕生の室のあった所である。爾来八百五十年の星霜を経て法灯絶えることなく全浄土教徒の魂の故郷と敬仰されている。法然上人、（圓光大師）二十五霊場の第一番である。　境内には、誕生椋、片目川、産湯の井戸など、永き歴史を物語るものがある。

②　法然上人の生い立ち

法然上人は、長承二（一一三三）年美作国久米南条稲岡庄（みまさかのくにくめなんじょういなおかのしょう）にご誕生された。父は久米押領使（おうりょうし）漆間時国（うるまときくに）、母は秦氏（はたうじ）という。漆間家の跡が今の誕生寺である。時国公夫婦には子供がなかったので観音さまに一心込めて子の授からんことを願い、やがて四月七日玉のような男の子を賜った。

その御誕生の時、空から二流の白幡が舞い降りて屋敷内の椋の木の梢にかかり七日の後飛び去ったと云われる。以来この椋を二幡の椋、誕生椋と呼ばれている。

こうした待望のひとり児は勢至丸と名付けられ健やかに成長していった。保延七（一一四一）年の春、漆間家は突然、明石源内武者定明（あかしげんないむしゃさだあきら）の夜襲を受けた。定明は稲岡庄の預所であったが、押領使時国の人望を妬みそれが夜討ちに及んだのである。九歳の勢至丸は小弓を以て敵将定明を射る。

右目を射られた定明は配下と共に引き上げたが父時国公は再び起つことのできぬ重傷で臨終に際して勢至丸に仇として定明を追うことい ましめ、「仏道を歩み、安らぎの世を求めよ。」と遺言されて四十三歳の人生を終えたが、当時の世相としては全く卓然した人生指針を与えられたのである。勢至丸は母の弟である菩提寺の住職、観覚得業上人（かんがくとくごう）のもとに引き取られることになった。観覚上人は勢至丸の偉才を認めて一日も早く比叡山に登って修行するように勧めた。

やがて登叡を決心した勢至丸は久安三（一一四七）年の春、母に別れを告げるために稲岡の里へ帰ってきた。六年ぶりに相見る勢至丸が再び離郷する心意に母は数年前夫時国を失い今また一粒種の勢至丸を遠い都の彼方へ送ることは忍びがたい悲しみであったが勢至丸は心から母を慰め自分の決意を告げた。その勢至丸の力強い求道の姿に秦氏君は涙ながら敬服された。

この母子が恩愛の絆を断ちきって愛別された。その秋、母秦氏は遠隔のひとり子、勢至丸を思いつつ三十七歳の若き身で病没された。時に勢至丸十五歳であった。かくして日本仏教を庶民的仏教として万民救済の念仏門の元祖法然上人こそこの勢至丸であった。八百五拾年前、岡山県久米の里のまれにみる信仰深き家庭の中に育ち、その父その母のすぐれた慈愛は無限の尊いものがあり、上人が幼年期を過ごした場所こそ、今日の誕生寺である。

戦国期に美作の美和山城主として現れる立石氏は、この漆間氏をその出自としているという。

【戦国時代の美作と備後】

1 美作と備後の共通点

○美作も備後も歴史用語で「境目の地域」と呼ばれる地域である。

○「境目の地域」とは戦国大名などの大勢力に挟まれた中間地帯をいう。

美作は、赤松・浦上・宇喜多・尼子・毛利に挟まれた中間地帯であり、備後は大内・毛利・尼子に挟まれた地帯であった。

○美作も備後も奉公衆の勢力が強い地帯である。

美作・・・高田城主三浦氏、鶴田城主併和氏、角田氏

備後・・・宮氏、杉原氏、三吉氏

○美作も備後も独立した中小の国人領主が多い。

美作・・・三星城主後藤氏、小田草城主齋藤氏、倉敷城主江見氏、岩屋城主中村氏、美和山城主立石氏、

備後・・・九鬼城主馬屋原氏、朝山二子城主楢崎氏、一条山城主渡辺氏、南天山城主和智氏、甲山城主山内氏、

2 美作の有力国人

① 三浦氏（高田城主）

三浦氏は関東の豪族三浦義明の後裔と伝えられる。すなわち三浦義明の子義澄の弟に佐原義連がおり、義連の子横須賀時連の子に杉本下野守宗明がいた。そして、宗明の次男貞宗が美作三浦氏の祖になったという。しかし、貞宗の美作入部の時期については、諸説あってよく分からない。美作に入部した貞宗は高田城を築き、随慶寺・化生寺を建立した。その後五代にわたり、在地豪族として勢力を築き、貞連のときに全盛期を迎えるのである。

貞宗の子行連について、暦応二（一三三九）年十月の天龍寺創建に際して、随兵として三浦遠江守行連の名が見え、その後、貞和五（一三四九）年、高師直と足利直義が不和となった「観応の擾乱」のとき、行連は師直方となって、直義邸を三浦駿河次郎左衛門藤村とともに襲撃している。さらに、同四年、応安元（一三六八）年に、越後奥山庄についての近隣土豪の領内侵入を幕府に訴えていることが、三浦和田文書に見えていることから、行連は父貞宗とともに横須賀に在住し、いまだ、美作高田には下向していなかったようだ。

長亨元（一四八七）年、足利将軍義尚の江州在番衆に三浦駿河守貞連の名がみられる。すなわち、足利義尚が、近江守護佐々木高頼を討伐した際に、貞連は佐野貞綱、有元民部丞、安威新左衛門らとともに、将軍に従って、近江坂本に出陣したのである。その後、応仁の乱が勃発し、美作の守護は赤松、山名の両氏が交互に争奪するところとなり、文亀年中、当時の守護山名氏の篠向城を攻略、家臣福田・金田等にこれを守らせた。『作陽誌』に、「貞連恒に篠向城を伺う、一日攻めて城将山名右京亮を殺し、その将福田、金田、近藤等をして之を守らしむ」とある。このころから、三浦氏も戦国時代の争乱の中に巻き込まれていった。そして、この頃までに福田・金田・牧・船津等の在地土豪を家臣団に編成したものと考えられる。

天文元（一五三二）年七月、三浦貞国が没し、その子貞久が家督を継いだ。貞久の代、天文四年のころには、本庄・建部郷を勢力下に収めている。このころ、出雲の尼子晴久は伯耆、因幡を攻略し、天文十三年、美作の久米郡、苫田郡、勝田郡の諸城を陥し、その部将宇山久信は二千余騎で高田城に迫った。これに対し、貞久はよく城を守り、尼子軍を撃退した。その後、尼子氏との戦いは天文十六年にもあったが、このときも尼子軍をよく撃退した。ところが、同十七年、貞久が病死し、嫡子貞勝が十一歳で家督を継いだ。そして、幼少の貞勝を叔父の忠近・貞尚・貞盛らが後見した。

貞久の死を知った尼子氏は、その機に乗じて攻撃を開始した。これに対した三浦氏の浦山城、沢の城、美甘、大料の諸城は落とされ、尼子軍は高田城に迫った。尼子方の大将は宇山飛騨守であった。三浦勢はよく防戦したものの宇山氏の猛攻に、ついに高田城は落城した。　落城後、貞勝は叔父貞尚に扶けられ、浦上氏の部将で久米郡岩屋城主の中村五郎左衛門を頼っていた。そして、永禄二（一五五九）年、尼子氏が安芸の

毛利氏の攻撃を受けている隙を突いて、貞久の旧臣牧兵庫助・金田加賀守等が高田城を奪回し、貞久の嫡男貞勝を城主とした。しかし永禄の初め、尼子氏の勢力が衰えてくると、西より毛利方に属していた備中松山城主三村家親が毛利軍の先鋒となって、永禄四年、同八年と美作の諸城を攻撃し、永禄八年十一月、高田城を攻撃した。攻防一ケ月、高田城は猛攻に耐えかねて、貞勝は自刃、城はふたたび落城した。

落城のとき、貞勝の妻お福の方は、子の桃寿丸とともに城を脱出し、備前津高郡下土井村に隠れた。その後、三村家親は、当時、美作久米郡を領有する宇喜多氏を攻撃したため、宇喜多氏により永禄九年に暗殺されるという事件があった。三村家親が暗殺されると、この虚に乗じ、三浦家旧臣の牧・玉串・市氏らは、貞久の末弟貞盛を大将として、高田城を攻撃し、城将の津川土佐守を討って、城は再び三浦氏の手に戻り貞盛が城主となった。しかし、貞盛の在城も永くは続かなかった。当時、毛利氏に降った尼子氏の再興を図り、山中鹿介らは尼子勝久をかついで毛利氏に対抗しようとしていたのである。これを知った毛利氏は、尼子勝久攻略を開始し、高田城もその攻撃の対象となった。永禄十二年、毛利の部将香川晴継、牛尾、三沢、三刀屋等の軍が高田城を攻撃、城は落ち、貞盛は討死した。落城当時、備中に出陣して合戦に参加していなかった貞盛の甥、貞勝の弟貞広が三浦氏の家督を継承し、備前の宇喜多直家に加勢をたのみ、直家から四千の援軍を得て、高田城奪還の攻撃を開始した。このころ、貞勝の死後、備前に逃れていたお福の方は、宇喜多直家の室となっており、その子桃寿丸を直家は我が子同様に養育していた。直家からの援軍はその縁故によるものであったろう。

貞広の攻撃に対して、毛利方の護りは堅く、城はなかなか落ちなかった。そのうち、尼子氏の旧家臣が毛利方を寝返るという事件が起こり、毛利元就は、当時九州攻めの兵の一部を割いて高田城救援に駆けつけさせた。そして、激しい合戦が繰り返されたが、城は落ちず、宇喜多勢はあきらめて兵を引いてしまった。やむなく、貞広は尼子の大将山中鹿介に援軍を求めた。鹿介は、これを容れて千余の軍を率いて援軍にきた、ここに至ってさすがの毛利方も敗れて、高田城は落城した。時に元亀元（一五七〇）年十月、高田城は三度、三浦氏の手に帰した。しかし、その後も毛利氏の美作侵略は続き、天正元（一五七三）年、同二年、同三年と連年、三浦氏の属城を攻撃している。さらに毛利氏のみではなく、宇喜多氏も、高田城を攻略しようと、その属城を攻め始めた。ここに、三浦貞広は、毛利氏、宇喜多氏の二大勢力にはさまれ、孤立無縁となった。天正四年春、宇喜多氏は、老臣花房助兵衛を城に入れて、毛利氏との和議を貞広に説いた。結局、貞広はこれを容れる以外になく、城を開いて、毛利氏の軍門に降った。一方、直家のもとで養育されていた貞勝の遺児桃寿丸は、天正十二年、京都に上ったとき、地震に遭い圧死するという悲運に見舞われた。そして、ここに三浦氏再興の途は絶たれ、美作三浦氏は滅亡にいたったのである。

②立石氏（美和山城主）

美作立石氏の本姓は、宇佐八幡宮の権大宮司を世襲した漆島という。漆島元邦が、封戸郡立石に住んで立石を称し、延喜年間に美作国に来住したと伝える。

元邦の長男・盛国が二宮立石家を継承し、次男盛栄は漆間姓を名乗って久米郡稲岡荘に居住した。この盛栄の子孫に浄土宗を興した法然上人が出ている。立石元邦の次男・盛栄から5代目の子孫を漆間時国と云い、時国の子が勢至丸、後の法然である。時国は国司の役人だったが、勢至丸が九歳の時に、管轄地域の荘園の所有者である明石定明によって殺された。時国が臨終の際に、決して復讐をしてはならないという言葉を残したことが、仏道に入るきっかけになったという。十三歳の時に比叡山に登り、二十五年間の修学の後、浄土宗を開いている。

二宮の本家は、平安、鎌倉、室町時代を通じ、美作国二宮高野神社の社司を継承する一方、美和山城を本拠にして、武力集団を率いて領土を守る荘司、地頭として続いた。高野神社は一宮、総社と並ぶ美作三大社で、二宮村という地名もこの神社に由来している。一宮は中山神社といい、今昔物語にも、中山は猿、二宮は蛇と、祭神が記されている。高野神社は美作地方の鎮守であると同時に、立石一族の氏神でもあった。

明応七（一四九八）年、勝田郡三星山城の後藤勝国が攻めてきたが、景泰はこれを撃退している。この戦いで勝国は戦死した。文亀二（一五〇二）年、後藤勝国の子勝政は亡父の恨みを晴らすために、浦上行重を誘って美和山城に攻めてきた。景泰の病歿後に跡を継いだ久朝はこの軍勢を防ぎきれず、ついに城は落ちた。久朝をはじめ一族の多くが戦死し、立石家は滅亡したかにみえた。しかし、久朝の遺児久勝が乳母に抱かれて難を逃れ、久勝の長男久胤、次男久泰によって家名再興がはたされている。

久胤ははじめ毛利家に属して軍功があり、輝元から恩賞を貰っている。関ヶ原の合戦後、毛利氏が減封処分を受け、美作から撤退したあとの慶長八年に森忠政が津山城主として入封してきた。しかし、久胤は森氏に仕えることなく、帰農して大庄屋となり、子孫は明治まで続いている。弟の久泰は孫一郎と称し、武将としての名声が高かった。後に親族の大橋敬之助がこの名を語り、倉敷浅尾騒動を引き起こしたことが知られている。

③後藤氏（三星城主）

美作における後藤氏の初見は観応元（一三五〇）年の山名義理書状である。それによれば後藤下野守が塩湯郷地頭職を推挙されており、以後、康季・良貞が地頭職を受け継いでいる。

三星城主後藤勝国の初見は明応七（一四九八）年である。塩湯郷地頭職と三星城主後藤氏との関係は不明である。室町時代、西播から東作にかけて後藤一族は多々蟠居しており、三星城主後藤氏もその一流であろう。明応七年、後藤勝国は美作中央部の立石氏を攻略し討死。その子勝政によって、文亀二（一五〇二）年立石氏を滅ぼし、東作州に覇を確立した。

勝基にいたってその勢力は全盛を極め、安東氏を初め、江見・水島・小坂田ら近隣の在地土豪をその支配下に組み入れた。弘治二年には、赤松氏の一族豊福氏の勢力を東作州から一掃した。

勝基ははじめ尼子氏に付いていたが、その勢力が衰退すると、備前の浦上宗景に従い、尼子氏と対立するようになる。対岸の倉敷城は尼子氏の勢力下にあり、永禄九（一五六六）年尼子氏の滅亡後、江見氏を在番とした。永禄九年から元亀二年に至る間、勝基は完全に東作州を掌握した。とくに在地第一の土豪であった江見氏に対しては配慮し、その名跡を存続させるべく庇護者となっている。

勝基の後嗣が与四郎基政である。基政の初見は天正二（一五七四）年で、勝基の後見によって施策が行われたようである。浦上宗景を備前天神山城に滅ぼした宇喜多直家は、同七年。美作を制覇するために出兵した。同年三月ごろから三星城攻撃がはじまり、五月落城し後藤氏は滅亡した。勝基は自刃し、基政は落ちのびたと伝えられている。

④齋藤氏（小田草城主）

齋藤氏については余り詳しいことは分らないが、小田草城は近くに広大な奥津湖があり、吉井川と香々美川が流れている。近世には高瀬舟が通っており河川交通の要衝を押さえた城であった。また、陸路では因幡街道にも面しており、陸上交通の要衝でもある。他の美作の中小領主と同様に齋藤氏も交通路を押さえた領主であった。齋藤氏は、その配下に桜井氏や太田氏など美作の地侍を擁しており、独自に直状形式の判物を発給しており、美作の有力な国人領主であったと推測される。

しかし、永禄年間になると齋藤氏の足跡は不明となり、これに代わって毛利氏の武将で岩屋城主であった中村頼宗が登場し、前述の桜井氏等の地侍を率いている。

⑤芦田氏（岩屋城主）

芦田氏についても、その出自は不明であるが、永禄年間頃から美作の戦国史に登場してくる。齋藤氏と同じく美作の地侍と考えられる中尾氏や宮川氏に書状形式の権利文書を発給している。齋藤氏と並んで芦田氏も美作の有力国人であったと推測される。

○芦田秀家・齋藤実秀連署寄進状（「美作総社文書」）

今度備前衆退散刻、既社内可及破伐二候処二、相抱申故無異儀候、先以可然候、就其俵数百貳拾俵之通雖押置候、為両人対神慮寄進仕候、恐々謹言、

（永禄五年カ）　　芦田備後守
十月十四日　　秀家　御判
　　齋藤河内守
　　実秀　御判

総社各社家衆　まいる

⑥牧氏（大寺畑城主）

牧氏は応永五（一三九八）年の熊野大権現社（高田神社）造営棟札写に、大願主三浦行連の執事として「牧左近介」の名が確認できることから、既に室町時代の初期から高田城主・三浦氏の重臣の地位にあったことが分る。その名字の地は高田城から十キロほど旭川を溯ったところに位置する「牧」の地である可能性が高い。

戦国時代の牧氏は、天文九（一五四〇）年に美作国岩屋城（現津山市久米）の合戦において「牧右衛門四郎」が討死し、天文十六年には備中国砦部の合戦において牧「菅兵衛尉」が討死するなど、三浦氏に対して多大な貢献をしている。牧兵庫助（尚春）の初見は、天文十六年から二十二年の間に比定できる十二月十六日付けの尼子誠久・牛尾幸清連署書状である。同日付けの尼子晴久袖判知行書立によって、その地位は「高田衆」（三浦氏家臣団）の統括者であったことが知れる。以後、天正三（一五七五）年に三浦氏が滅亡するまで、牧尚春は三浦氏の重臣として活動している。

近世の牧氏は津和野藩の重臣である。牧氏が亀井氏家臣となった経緯については不明である。しかし、戦国期に牧尚春が一貫して尼子氏と強い結びつきを有していたことからして、尼子氏重臣の系譜を引き、家臣に尼子氏の旧臣を多く抱えた亀井氏に属する諸条件が整っていたことは間違いない。また、牧尚春が連携して活動した山中鹿介の女婿が亀井茲矩（初代津和野藩主の父）であった。

【参考文献】
○『津山市史』、牧祥三氏『美作地侍戦国史考』、『日本歴史地名大系　岡山県の地名』『久世町史』
○渡辺大門氏「戦国期美作における中小領主の特質」（『仏教大学大学院紀要』所収）
○同氏「美作地域における奉公衆の研究」（『美作地域史研究』所収）
○岸田裕之・長谷川博史「石見牧家文書―その翻訳と解説―」（『広島大学文学部紀要』所収）
○長谷川博史「尼子氏の美作国支配と国人領主層の動向」（『戦国大名尼子氏の研究』所収）
○『黄微古簡集』、『美作古簡集註解』

備後・美作、二つの福田氏をめぐって

木下和司

福山市芦田町大字福田にある利鎌山城の城主は、「福田盛雅」と伝えられている。これは近世初頭にその原形が成立したと推測される『備後古城記』の福田村の項に載る「福田遠江守藤原盛雅　利鎌山、戸鎌山共」という記述が根拠になっていると推測される。備後の福田氏に関する確かな史料は非常に少なく、その実態を明らかにすることは困難であるが、備南の有力な国人として福田氏が存在したことは確実である。一方、美作に於も「福田」名字とする一族が存在する。近世の美作藩森家の家臣であった木村昌明が編集した『武家聞伝記』第一巻・舛形之城主の項には、「福田玄蕃勝昌、同助四郎盛昌」との記述があり、美作にも福田氏が存在している。平凡社の『岡山県の地名』では、「北東利元山にある利元城跡は、備後国芦田郡福田村相方の福田助四郎盛昌が天文年中（一五三二～五五）に築いたもので、同十三年に尼子晴久の軍門に降る」という美作の近世地誌『東作誌』の記述を紹介しており、備後福田氏と美作福田氏を同一視している。

しかし、『東作誌』の記述は一次史料による裏付けが取れているものではないため、備後及び美作に残る中世の一次史料をベースとして備後福田氏と美作福田氏の関係を考えてみたい。

備後に於ける福田氏に関する史料は、左記の二つだけである。

①（年欠）九月廿七日付け　正法寺宛「福田盛雅書状写」（『萩藩閥閲録遺漏』巻四の二　高須直衛書出）

②（天正五年）後七月十八日付け　井上春忠宛「福田盛雅書状写」（『萩藩閥閲録』巻十一の二　浦図書書出）

史料①は、大永年間に（一五二一～二八）に行われた備後国衆間の大規模な和議「神辺和談」に関係した史料である。その「端ウハ書」の写には、「福田三郎右衛門尉　盛雅」とあることから、大永から天文年間にかけて備南に福田盛雅という武将が存在したことが確認される。次に、史料②は福田氏と備前の宇喜多氏との婚姻に関して、天正五（一五七七）年に福田盛雅が小早川隆景の了解を求めた書状である。史料②の福田盛雅は、史料①の孫の世代と推測される。つまり、戦国時代の備南には芦田郡福田の在地名「福田」を名字の地とした家系が存在していたことになる。備後の福田氏に関して、備後関係の一次史料からはこれ以上のことは確認されない。

次に、美作関係の史料から福田氏に関するものを左記にあげる。

③ 永禄十二年十二月十九日付け「清居山新龍寺棟札」（『東作誌』所収）

④（天正七年）十二月十七日付け　湯原春綱宛「吉川元春書状写」（『萩藩閥閲録』巻百十五の一　湯原文左衛門書出）

※天正七年末以後、舛形城及び祝山（医王山）城の合戦に関して、『萩藩閥閲録』及び『岩国藩中諸家古文書纂』に福田盛雅関係の史料が沢山残されている。

⑤（天正五年）十一月朔日付け　大原主計頭宛「毛利輝元書状」（「木村文書」『久世町史　Ⅱ』所収）

⑥（天正六年）八月二日付け　牧佐介宛「花房職秀書状」（「美作牧家文書」『久世町史　Ⅱ』所収）

⑦（年欠）四月廿四日付け　猪股助五郎宛「福田理昌奉書写」（『美作古簡集註解上』所収）

⑧天正二年九月廿二日付け　福田助四郎宛「三吉元孝・同興能連署書状」（「木村文書」『久世町史　Ⅱ』所収）

⑨天正六年六月廿三日付け　福田助四郎宛「三吉元孝・同興能連署書状」（「木村文書」『久世町史　Ⅱ』所収）

⑩（天正八年）三月廿三日付け　水島右兵衛宛「福田孫八書状写」（『美作古簡集註解上』所収）

史料③・④は福田盛雅に関するものである。史料③によれば旧東北条郡上横野村（現津山市上横野）にあった清居山新龍寺付近の永禄十二（一五六九）年頃の地頭は、福田三郎右衛門尉であったことが分る。この人物の実名は、史料①から盛雅であったことが知れる。また、この時の地頭代は寺岡備前守であったことも分る。毛利氏は、永禄四年頃から備中の三村家親を先鋒として美作に侵攻しており、福田氏もこの頃から美作へ進出していたと推測される。永禄十二年四月には、毛利元就が美作一宮に対して判物を発給しており、この頃には毛利氏の権力がかなり美作に浸透していたと推測されることから、備後・福田氏の美作に於ける所領獲得も永禄年間の後半と思われる。

史料④から天正七年頃には福田盛雅が毛利氏の舛形城番を務めていたことが確認される。また、毛利方の出雲国人である湯原春綱・小川元政・塩屋元真が城番を務めていた祝山（医王山）城の城番頭を兼ねていたことも分る。また、寺岡備前守は祝山城を廻る合戦の書状に登場することから、福田盛雅の重臣であったと考えられる。

史料⑤・⑥・⑦は福田盛雅の子息と考えられる理昌に関するものである。理昌は史料②で天正五年閏五月頃、宇喜多氏との縁組を行った人物であり、縁組の成立した後、同年十一月には美作での城番を努めていたことが、史料⑤から判明する。史料⑤は、毛利輝元が美作の毛利方国人衆に宛てた書状であり、大原主計頭（美作の国人）、中村頼宗（美作の国人力）、牛尾次郎右衛門尉（出雲の国人）、近藤豊後守及び福田理昌に宛てて、織田氏の美作侵攻に備えて播磨・美作国境の城普請を命じたものである。天正五年

には福田理昌は、美作における有力な毛利方の国人として認識されていたことになる。史料⑥も、理昌が美作に於いて毛利方の有力な武将であったことを示すものである。史料⑥の発給者である花房職秀は宇喜多直家の重臣であり、宛所の牧佐介は美作を代表する国人領主・三浦氏の筆頭重臣である。この史料は、職秀と理昌の間に生じた揉め事の仲介を牧氏が取ったことに対する礼状であり、理昌が備前と美作の有力者と対等の立場にあったことを示している。史料⑦は、美作の在地領主である猪股氏の軍功を賞した奉書である。別の史料によれば猪股氏は、小早川隆景の支配下にあることが確認できることから、史料⑦は隆景の意を受けて理昌が発給したと推測される。備後福田しは、小早川隆景から美作の在地領主を預けられていたことが分る史料である。

以上の史料分析から、備後福田氏は永禄四年頃から小早川隆景の指示を受けて美作に進出し、美作中央部に所領を給与され、美作の在地領主を預けられる立場にあったことが判明する。

史料⑧・⑨は三吉元孝・同興能が福田助四郎に宛てて美作西部から中央部にかけての所領を給与したものである。また、福田助四郎は、天正年中に毛利輝元へ音信の礼銭を送っており、毛利方に属していた在地領主と推測される。しかし、ここに現れる三吉興能・元孝の素性が不明であるため、毛利方での福田助四郎の立場は分らない。

史料②によれば、福田理昌と宇喜多氏との婚姻に関して、福田盛雅は直接に毛利輝元・小早川隆景の了解を求めており、盛雅は輝元・隆景に直属した武将であったと推測される。備後福田氏に対する毛利氏の所領宛行状は管見の範囲では認められていないが、他の例から考えて所領宛行状は、毛利輝元が直接発給すると考えられる。これに対して福田助四郎は三吉氏から所領宛行を受けており、備後福田氏とは毛利氏に対する立場が異なっていると考えられる。近世に成立した『備前軍記』によれば、天文二十二（一五五三）年の尼子晴久と浦上景宗の美作・高田城をめぐる合戦に際して、浦上方に参じた武士として福田氏の名が認められる。また、久米南条郡には福田村（現津山市福田）が存在し、美作にも在地名の福田を名乗った武士がいたと考えられる。史料⑧・⑨は、この美作福田氏に関するものだと思われる。

史料⑩は、美作福田氏の一族と考えられる孫八が美作の在地領主である水島氏に発給した所領宛行状である。『美作古簡集註解上』の解説によれば、孫八の実名は盛佐となっている。更に、盛佐の一族は、備後福田氏と同一視されている。しかし、前述したように備後福田氏と美作福田氏は別の一族と考えられる。近世に入って美作で地誌類が作成される際に、二つの福田氏が混同され、美作福田氏の祖先が備後から来たという伝承が形成されたと思われる。

【祝山城（医王山城、岩尾城）と備後国衆・福田氏】

1 祝山城の初見

① 牛尾員清書状写（『美作国諸家感状記』）

去ル十二日岩尾山表於イテ、斎藤孫市郎方合戦ニ及バレ候ノ処、別而御粉骨ノ由披露セシメ候、無比類ノ旨相心得可申ノ由ニ候、恐々謹言、

（永禄二年）　　（員清）
十二月十六日　　牛尾次郎右衛門

桜井与十郎（藤兵衛）殿

② 斉藤實秀判物写（『美作国諸家感状記』）

今度岩尾山表於イテ、實次鑓渡候ノ処、脇ニ而同前ニ鑓仕ラレ候段、寔忠節無比類次第ニ候、夫ニツイテ加給シテ薪新郷之内平嶋分田数壱町合力仕候、全領知肝要候、於向後も弥忠儀専一候者也、　仍如件、

永禄弐
十二月十八日　　（斉藤）實秀

桜井藤兵衛殿

※岩尾山城（祝山城）の初見は、永禄二年である。美作の地侍と推測される桜井氏の軍功を尼子氏の家臣である牛尾員清と美作の有力国人

である齋藤実秀が賞している。

3 備後国衆福田氏と美作国

① 清居山新龍寺棟札（『東美誌』東北条郡横野村）

「永禄十二年巳巳十二月十九日願主権律師重明

奉造立仏壇成就時地頭備後國住福田三郎右衛門尉（盛雅）代官寺岡備前守諸旦那繁盛処」

※備後国衆福田氏も、永禄年間の初め頃より、毛利氏に従って美作に出陣していたと推測される。永禄十二年以前に美作において所領を獲得していたことが確認される。

② 福田盛雅書状写（『萩藩閥閲録』巻一一ノ二）

畏而申上候、抑阿州両国之儀、如御存分被仰付候段、尤目出存候、仍御太刀代致進上候、御祝儀迄候、隋而理昌（福田）岡山所縁之儀、重而蔵田（元貞）殿に得貴意候間、可被仰上候、如何様共相調申候様言上之外無之候、此旨可預御披露候、恐惶謹言、

（天正五年）

後七月十八日　　（福田）盛雅　判

井上又右衛門尉（春忠）殿

③ 毛利輝元書状（『木村文書』）

急度令啓候、随而信長五機内致一変、近日作州境越山之旨申越候、於然者、早々可致出張候条、其内人馬兵養陣具等用意尤二候、猶新蔵可申候間、不能子細候、謹言、

（天正五年）

十一月朔日　　輝元（花押）

去ル廿八日之脚力二申遣通、其国上方筋城々出丸曲輪等普請はた〜と可指急候、竹木人足縄被下何にても入用之物其郡々支配方へ、自両川可申参条、忠節此時也、

大原主計頭殿

中村大炊助（頼宗）殿

福田玄蕃助（理昌）殿

牛尾次郎右衛門殿

近藤豊後守殿

※福田理昌は、天正五年の後半に宇喜多氏と婚姻関係を結び、天正五年末には美作での在番を務めていたと考えられる。因みに、大原主計頭、中村頼宗は美作での有力国人、牛尾次郎は尼子氏から毛利氏方に転じた出雲の有力国人である。

④ 花房職秀起請文（『美作牧家文書』）

理昌依御懇意、貴所之儀福田（理昌）方可被仰談候旨尤専一候、然上者御知行分之事、如近日聊不可有相違候、勿論於御身上者毛頭不可有別心候、若此旨於偽者、

（神文略）、

天正六年

八月二日　　（花房）職秀（花押）

（ウハ書）

「

牧　佐介殿　まいる

花房助兵衛

職秀　」

※天正六年、宇喜多氏の重臣である花房職秀が福田氏との和睦について、仲介の労を取った高田城主・三浦氏の重臣・牧左馬助にあてた起請文である。美作に於ける福田氏の立場が美作の国人間でも重要であったことを示す史料である。

⑤ 福田理昌奉書写（『美作古簡集註解』）

去月二十三日於河辺志戸之原合戦之時、穿鎧被疵粉骨無比類之條、尤神妙之至候、彌可励軍功之事所仰候、仍如件、

四月二十四日　　理昌

猪俣助五郎殿

⑥ 小早川隆景書状写（『美作古簡集註解』）

一筆申候、今度御籠城之義、旁御忠儀之段無比類候、連々不可有忘却之條一廉可致褒美候、今少之間頼存候、此方加勢之儀無據相滞候、萬々彦任口上候、恐々謹言、

七月廿日　　隆景

猪俣采女佐殿

※福田理昌は、美作の地侍・猪俣氏に対して、小早川隆景の意思を受けて奉書を発給する立場にあったことが想定される。

⑦ 小早川隆景書状写（『美作古簡集註解』）

幾度申候而も當城堅固之段誠無比類候、彼是可申述此者進置候、彌無二之御覚悟肝要候、心底之通湯原小河所へ申遣候條、毎事被談御入魂頼入候、猶任口上候、恐々謹言、

七月十日　　隆景

寺岡備前守殿

猪俣采女殿

※寺岡備前守は、史料①に登場する福田盛雅の代官である。寺岡氏は小早川隆景から福田氏に預けられた地侍クラスの武士であったと推測される。尚、傍線部からこの書状の発給年次は天正八年と推定され、寺岡備前守と猪俣采女は祝山城に籠っていたと考えられる。

⑧ 毛利輝元宛行状写（『美作古簡集註解』）

去十日宮山城下へ相働令放火並三人討取之段、三輪與三栗原惣兵衛ヨリ慥注進無比類候、奮冬も其城在番等何角ヨリ申處、申速御請之段御感不斜、本領之事勿論為加給東郡之内於横野村百貫宛行候、全可令領知者也、

天正二（七）年六月二日　　輝元

福田玄蕃助殿

4 祝山（医王山）城の合戦

① 尼子晴久袖判知行書立（『石見牧家文書』）

晴久（花押）

一 高田庄（真島郡）并草賀部村

一 久世保（大庭郡、以下同）

一 真島庄

一 吉見・田原（大庭郡、以下同）但除国領

（中略）、

右此旨高田衆へ可被仰渡候、為向後、晴久袖判被仕候也、

（天文廿年カ）十二月十六日　　牛尾遠江守 幸清（花押）

尼子式部少輔 誠久（花押）

（貞尚）

大河原孫三郎殿

※祝山城のある吉見地区は、元々、高田城主・三浦氏の支配する武士団である高田衆の支配地域であったことが確認される。「作州高田城主覚」によれば、大河原貞尚は三浦貞久の弟で、岩屋城の城主とされている。また、この書立てから天文年間の末になっても美作では国衙領が存在していたことが確認される。但し、国衙領とは言っても、下級官吏や国衙在庁達の収入源としての意味しか持っていなかったと推測される。

② 齋藤實秀宛行状写（『美作古簡集註解』）

今度於岩尾山表、實次鑓渡候之処、脇ニ而同前鑓被仕候段、寔忠節無比類次第候、就夫為加給薪新郷之内平嶋分田数壱町合力仕候、全領知肝要候、於向後も弥忠儀専一者也、

仍如件、

永禄二年

十二月十八日　　（齋藤）實秀

桜井藤兵衛殿

③ 小早川隆景他二名連署書状（『吉川家文書』）

就其境之儀、彼是為可蒙仰、粟彦綿惣被差出、条々送承知候、

一 草刈祝山同篇候哉、雖然、祝山数ヶ所之付城、日夜及取相ニ付而、難堪之通、咲止存候、殊兵粮ニ相縮之由、一大事与存候、被成其御短束之由、専一候、

一 祝山北賀茂中間一城之儀、彼両所談合候て、可被取付之由被仰含、湯民部少輔ニ蔵田与三右衛門尉森脇飛騨守被相副、又従鳥執茂一勢被仰理、因州若桜表夏以来在陣候御手之衆、其外彼引合被差上、見懸之行可被致短束之通、被仰付之由、尤肝要存候、

（中略）

（天正七年）

十一月二日　　隆景（花押）

通良（花押）

貞俊（花押）

元春

元保　御返報

元長

※天正七年五月頃、宇喜多直家が織田方に寝返ったことにより、毛利・織田の最前線は備前と備中・美作国境まで後退する。備中では佐井田城（現真庭市下中津井）に毛利氏領国の国人達が城番として招集されている。美作では九月頃から草刈氏の所領北賀茂付近で戦いが起こっており、北賀茂の南部にあたる祝山城付近も緊張状態に置かれたと推測される。十一月頃になると、この書状にあるように祝山城の付城での合戦が行われている。この頃から湯原春綱や塩屋元真が祝山城に籠城している。

④ 吉川元春書状（『萩藩閥閲録』巻一一五ノ一）

態申候、仍此表之儀明日十八日至四畝取懸候、即時ニ可拉之条吉左右

軈而可申入候、

（福田盛雅）

彌福　三　被仰談、堅固之御番肝要候、南条事雖逆意候、一円無珍儀候、盛重・宍道其外人数相副、小森・山田以下差出候条、彌不可有異議候間可御心安候、何茂御方使隆景申談相調可差上候間其時可申入候、恐々謹言、

（天正七年）

十二月十七日　　元春　御判

湯右

⑤ 蔵田元貞書状（『萩藩閥閲録』巻一一五ノ一）

此表四畝一着儀者、頓盛雅申入候条可被仰入候、一両日中高田表被成御陣替、寺畑・宮山儀可被果儀定候、仍御申儀隋分申候而相調進之候、於伯州二百五拾石被遣候在所坪着儀者彼表落着之上ニ而可被進之由候、可御心安候、彌又重而可被仰越候、披露可申候、御使如御存知涯分入魂申候、御吉事重畳可申入候、恐々謹言、

（天正八年）

正月十七日　　蔵田与三右衛門事也　元貞　判

湯右

※天正七年十一月頃には、福田盛雅も舛形城番と兼任の形で祝山城番を命じられたと推測される。但し、この時点での盛雅の拠点は、舛形城

であったと推測される。

⑥ 吉川元春書状写（『藩中諸家古文書纂』十五）

鹿野へ出候鳥執衆□□□□先以可然候〜、黒土（黒岩土佐守）被越之由、尤可然候、祝山への伝之城取付さま彼是可相尋候、黒土をも同道候て是へ可被上候〜、早々計こと可有同道候〜、可被急候〜、恐々謹言、

（天正八年）
三月三日　元春　御判
蔵与殿
森飛殿

⑦ 吉川元春書状写（『藩中諸家古文書纂』十五）

折紙到来令披見候、仍其表之儀、升形普請頓相調之由、可然候、就夫弥其許行之儀、其外為可被仰遣渡邊石見守被指出候、従隆景・我等も一人宛申付遣置候、於委細者両三人可申達候間、元政・元康・元俊被遂内談、為御弓箭可然候様、短息肝要之通被仰遣事ニ候、天王山之儀被取付候て番衆にも文候ハ々、元康在番候て可有馳走之通被申越候、誠之存寄候て之儀ニ候、何茂其許各内談候て、以議定之上可申談候、とにかく祝山草刈之儀、被指救度与之儀まてニ候間、何と様も以其短息、可有相談候迄被遣事ニ候、両人事も其分別候て、元康へ可被申進事肝要候、於趣者児市（児玉元實）可申候間、不能紙面候、恐々謹言、

（天正八年）
三月十九日　元春　御判
蔵田与三右衛門殿
森脇飛騨守殿

⑧ 吉川元春書状写（『藩中諸家古文書纂』十五）

一筆申遣候、
一天王山之儀是非可取付覚悟ニ候へ共、宮山之儀□□□□各被申之間、先以指懸候、彼城一着候者、則其境可被及行候条、其間之儀堅固之様何と様にも福三可申分事肝要候、
一祝山重而人質之儀肝要之儀候間、能々申分早々至其城差出候様調専一候、先天王山不仕付上にても彼人質事千万〜入事候、不可有油断候、
一祝山并仙普請事、此節無緩被申付候様、是又可申遣事専一候、委細蔵与ニ申聞候間、内談にて相調事肝要迄ニ候、猶重々可申遣候、謹言、

（天正八年）
後三月廿一日　元春　御判
森脇飛騨守殿

※天正七年十一月頃から毛利氏奉行人である蔵田元貞と吉川元春の重臣である森脇春綱が舟形城へ派遣され、美作中部戦線での検使の役目を果たしていたと推測される。二人は、舟形城に入って前線である祝山の監督をしていたと推測される。また、祝山籠城衆に対する人質は舟形城に集められ、蔵田元貞・森脇春方の管理下に置かれたと考えられる。また、祝山の防備強化が求められていることも分かる。

⑨ 毛利輝元書状（『萩藩閥閲録』巻一六一）

今度其方事祝山へ可遣之由申聞候處、則事請祝着候、自然万一立用事候ハ々、其方忠儀之段、對子供可相届候、不可有忘却候、心安可存候、謹言、

（天正八年）
六月廿一日　輝元　御判
江山彌左衛門殿

※ほぼ同文の書状が六月廿日付けで井上元治宛（『萩藩閥閲録』巻八○）にも出されている。祝山への大規模な援軍派遣が試みられたこ

とが分かる。

⑩ 毛利輝元宛行状写（『萩藩閥閲録』巻一一五ノ四）

祝山兵粮之儀事、至舛形追々指越之候、福　三右申談、可取入事肝要候、於此方少茂無油断候、相心得可申候、謹言、

（天正八年）
六月廿一日　　輝元　御判
湯原豊前守殿

※天正八年六月頃から祝山城の兵粮の問題がクローズアップされてきている。以後、兵粮問題が祝山城を廻る合戦の中心課題となる。

⑪ 吉川元春書状写（『藩中諸家古文書纂』十五）

今度祝山兵粮五百表之儀、自御本陣於葛下御短息候而、少完茂被差遣之由候、然者祝山罷居候此方番衆江茂兵粮之賦候て、可勘渡事肝要候、殊塩豊事、手前一入無調法之由申候間、彼者ニて弥其分別候て可心付候、吉田奉行衆ニ茂右之理申候て、其方気遣専一候、猶口上ニ申聞候、謹言、

（天正八年）
七月五日　　輝元　御判
森飛殿

⑫ 小早川隆景書状（『萩藩閥閲録』巻五一）

何ヶ度申候而茂某許堅固之段大慶此事候、福　三被相談彌無二之御才覚専一候、仍銀子三枚進之候、補空書計候、猶期吉事候、恐々謹言、

（天正八年）
七月十日　　隆景　御判
小　右殿

⑬ 小早川隆景書状写（『美作国諸家感状記』）

今度其方事、籠城中対盛雅別而忠心之由無比類候、弥当城（祝山）堅固之儀御心懸肝要ニ候、既来廿五六日発足候間、追々着陣候条、大利案中ニ候、去年以来御労之段申入計ニ候、猶善任口上候、恐々謹言、

（天正八年）
八月九日　　隆景　御判
芦田菅兵衛殿
芦田甚左衛門殿

⑭ 吉川元春書状写（『萩藩閥閲録』巻一一五ノ一）

（前略）、
一 當城（祝山）之儀中旬迄は兵粮可有之由尤可然候、吉田ニ茂此比至中途出張之儀候、左候間隆景被申談、急度其口可被及行候、唯今迄無二之覚悟被相抱事候条、今少何と様にも有才覚、加勢可待付事肝心迄候、
（後略）、

（天正八年）
八月十五日　　元春　御判
湯　豊前守殿

⑮ 吉川元春書状写（『藩中諸家古文書纂』十）

急度申祝山之儀、直家取懸種々及取拵、過半和平相調候処、備前衆指操之趣、福田其外此方番衆聞付、各指固、甲丸三重堅固相抱、無二之覚悟之由、追々申来候、誠盛雅無比類段、申茂不足候、就其、右趣隆景へ申遣候間、此書状早々笠岡へ被付候て可給候、尚吉事追々可申候、恐々謹言、

（天正八年）
九月三日　　元春　御判
（宛所欠）

※天正八年八月頃から宇喜多直家が直接に祝山城攻略に取り掛かっている。祝山城には甲丸と呼ばれる曲輪があったことが分かる。また、

やはり兵粮が問題になりそうな気配が見えている。

⑯ 毛利輝元宛行状（『萩藩閥閲録』巻五一）

至當城備前衆差詰之、城中敵同意候而既及落去候處ニ、両三人無二之覚悟三之丸相抱、剰敵心之者立出、福田事茂堅固之由誠肝要候、併悉皆両三人短束之故候、更無比類候、此方之儀昨日至伊多岐出張候、今日至山中着陣候、追々令陣易、即時可及行議定候、其段可心安候、此時可得太利と本望之至候、彌堅固之調儀専一候、猶期来喜候、謹言、

（天正八年）
九月四日　　輝元　御判

湯原豊前守殿
塩屋豊後守殿
小河右衛門兵衛尉殿

※籠城衆の中に裏切りが出ていることが分かる。湯原春綱・塩屋元真・小川元政等の奮戦により三の丸を守りきり、裏切り者を城外に追い出したことが分かる。

⑰ 小早川隆景書状（『萩藩閥閲録』巻五一）

去二日之御状、昨日五日到来令披見候、何ヶ度申候而も其許旁御覚悟之段無比類候、先書ニ如申、備中内郡之衆中悉至舛形楢　弾（元兼）相添差出候、吾等事軈而高田（美作）令着陣候条、其内之覚悟肝心候、迚も各打立候儀候間、其内不慮候てハ不可有曲候、委細従蔵　与（蔵田元貞）所可申候、恐々謹言

（天正八年）
九月六日　　隆景　御判

福　三（福田盛雅）殿　参
小与兵衛（小川元政）殿
塩　豊（塩屋元真）殿
湯　豊（湯原春綱）殿

※天正八年九月頃から宇喜多直家が直接出陣し、祝山城を廻る戦闘が激しくなってきたために、福田盛雅もその拠点を舛形城から祝山に移している。また、備後国衆である楢崎元兼が備中の内郡衆を率いて舛形城に入ったことが分かる。元兼は盛雅が祝山へ移動したことの補充として舛形に入ったことになる。また、小早川隆景が間も無く西美作の要衝・高田城に着陣する予定であることを伝えている。

⑱ 毛利輝元宛行状写（『藩中諸家古文書纂』十五）

態申遣候、祝山兵粮之儀、□□延引之段、笑止千万候、兵粮之儀ハ多分相調候ー、山内并其元差出候益形送候儀、貞俊・児三右是非共短息候へと申遣候、方角之村々へ申付候者、従使者可在之候、
一　方角調之子細候義、何と様ニも入眼候様短束肝要候、其方事彼方此方辛労心遣之至、無申計候、弥不可有緩候、
一　上勢少々因州へ打下候□鳥取堅固候者不可有珍儀候、何篇ニ付而祝山表への加勢之儀専一まて□□一刻茂差免候様にと万々其短束迄ニ候、
（後略）、

（天正八年）
十月十一日　　輝元　御判

森脇飛騨守殿
蔵田与三右衛門殿

※祝山城への兵粮搬入が課題となっている。織田勢が因幡へ攻入っているが、祝山への加勢が最優先事項であると、毛利輝元が舛形城の森脇春方・蔵田元貞へ指示している。

⑲ 吉川元春書状写（『藩中諸家古文書纂』十六）

御折紙拝見候、仍而祝山仙々番衆斎藤（近實力）・塩屋家中之者構敵心之被退候哉、不及是非候、其付而本陣・隆景へ追々御注進之由、肝

要候、至中途被打出たる儀候条、其而於加勢者不可有緩候、此表之儀茂先年ニ度々如申候、鳥執之分に今少申付候故、延引之様候、併無油断候、兵粮等之儀、是又得其心候、雖不及申、自其元も祝山へ随分可被付心事専一候、恐々謹言、

（天正八年）
十月十四日　　元春　御判
吉源四郎殿
森飛騨殿

※塩屋元真家中と美作の地侍・近藤氏に裏切り者が出たことが分かる。吉川元春は鳥取城が織田方に攻められているために、因幡から動けなくなっていることが分かる。元春も祝山への兵粮搬入が大きな課題であることを認識している。

⑳ 毛利氏奉行人連署書状（『萩藩閥閲録』巻一一五ノ一）

明日　廿八　御両殿様（輝元・隆景）爰許御着陣候、然間其表御行之儀可為五三日候条、彌被得其意堅固之御覚悟肝要候、仍為音信銀子貳枚被遣候、猶遂々可申入候、恐々謹言、

（天正八年）
十月廿七日　　（福原）貞俊　判
（福原）元俊　判
（児玉）元良　判
（口羽）春良　判
湯原豊前守殿

※毛利輝元・小早川隆景の高田城着陣は、天正八年十月廿八日である。四、五日の内に祝山への援護作戦を実施すると伝えている。

○ 毛利輝元宛行状写（『藩中諸家古文書纂』十五）

急度企使者候、祝山之儀、福田其外被退候、然上者其面弥堅固之御心遣相極此節候、敵及行候者即加勢之儀可申付候、随而爰元之儀宮山付城相調候条、来口行為可差急、先以置申達令陣替候、其境口左右可承之、此方在陣所中間ニ一勢残置候、何篇之趣至高田於注進者即出張不可有遅々候、猶志道左右馬助可申候、恐々謹言、

（天正八年）
極月廿七日　　輝元　御判
吉田源四郎殿
森脇飛騨守殿

※天正八年十二月末、福田盛雅・湯原春綱・塩屋元真・小川元政は祝山から退城している。祝山の攻防戦に勝利したための退城か、敵方に開城したための退場かは分らない。以後の美作に於ける戦線が祝山より西部の宮山城や岩屋城になっている。

○ 吉川元春書状写（『萩藩閥閲録』巻一一五ノ一）

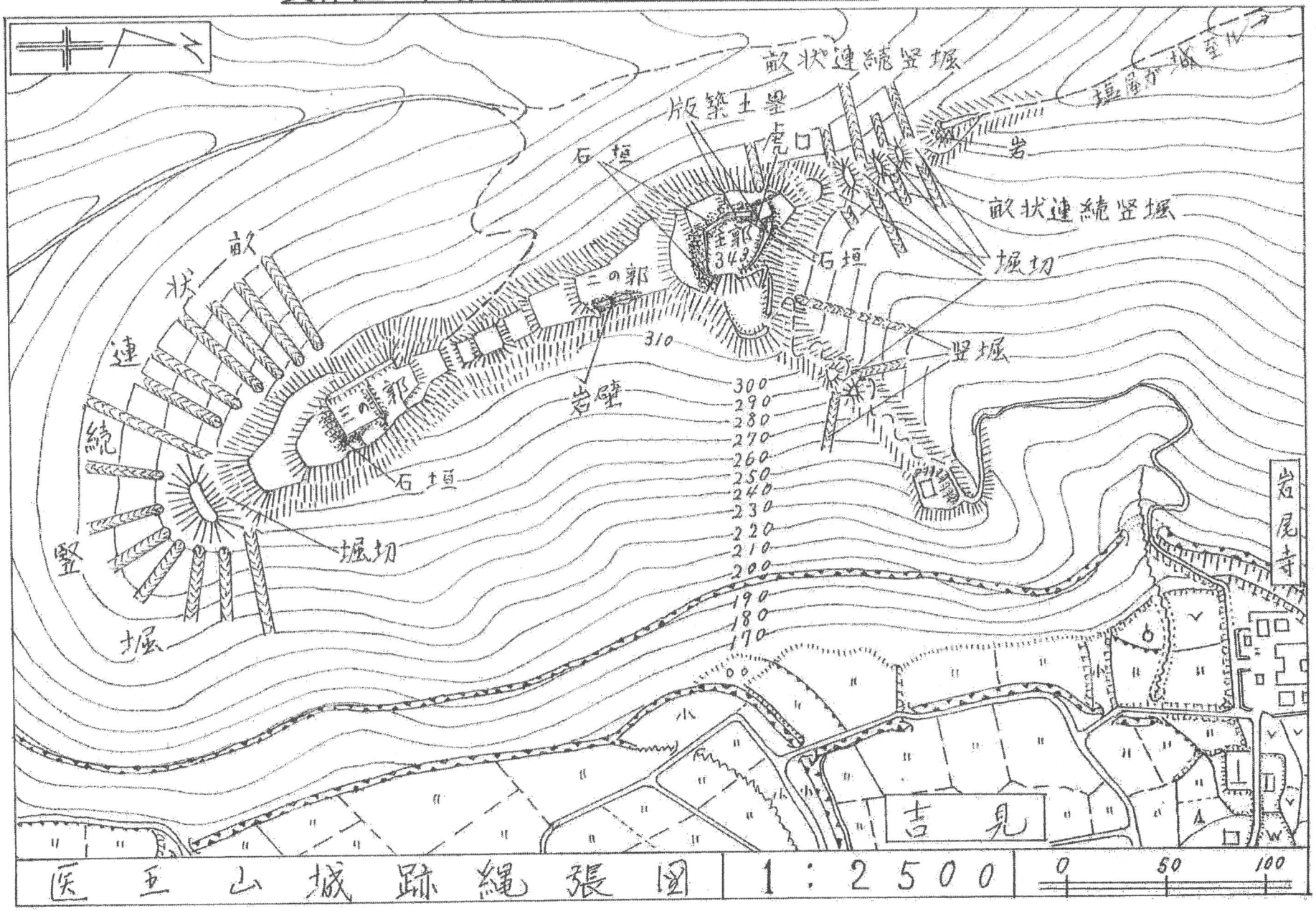
今度湯原右京亮・小河右衛門兵衛尉并塩屋豊後守於祝山籠城、永々窮困之儀中々無比類候、然所ニ福田方小田草被指籠候付而、彼三人之者共事茂舛形・小田草之間重而在番申渡候条、兼而御約束之地、無相違可被宛遣之事肝要候、具以条数申上候条不能詳候、恐々謹言、

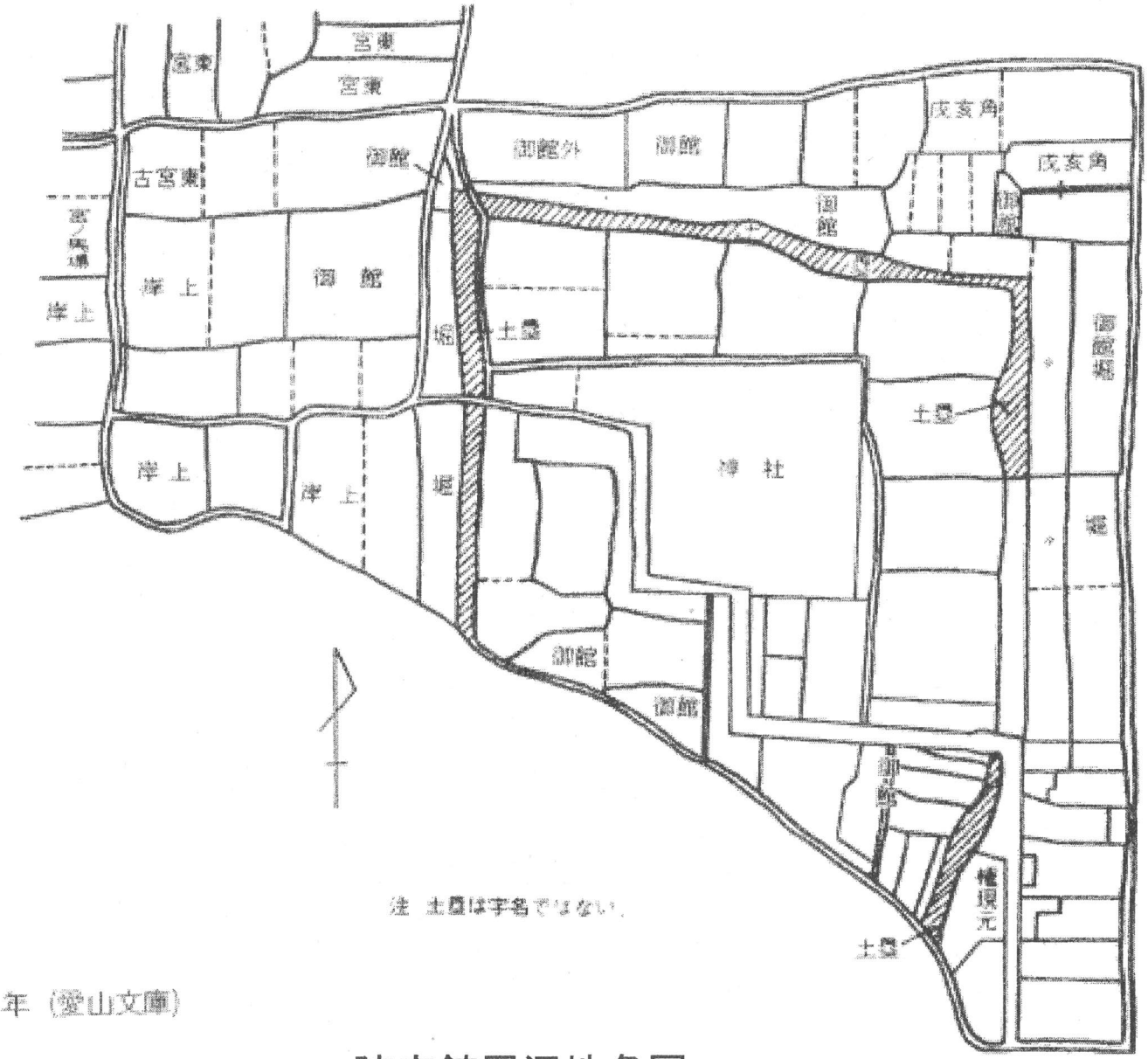
（天正九年）
正月廿一日　　元春　御判
児玉市佑（元貞）殿

※祝山城より出た福田盛雅は、舛形城より更に西の小田草城に入っている。また、湯原春綱・塩屋元真・小川元政の三名は、舛形城と小田草城の間の城の城番を命ぜられている。城番を命じられた城は、日上山城か春日山城と推測される。

美作医王山城（祝山城、岩尾城）縄張り図

作図　山田省吾氏



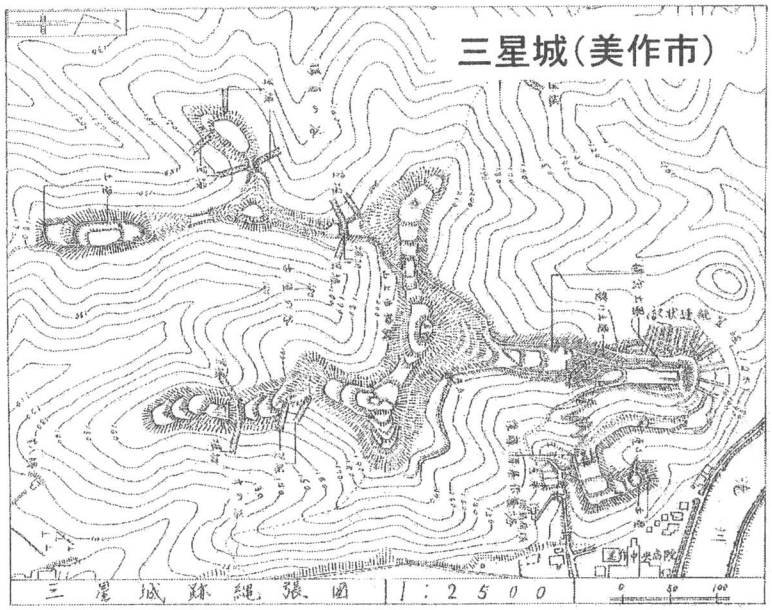


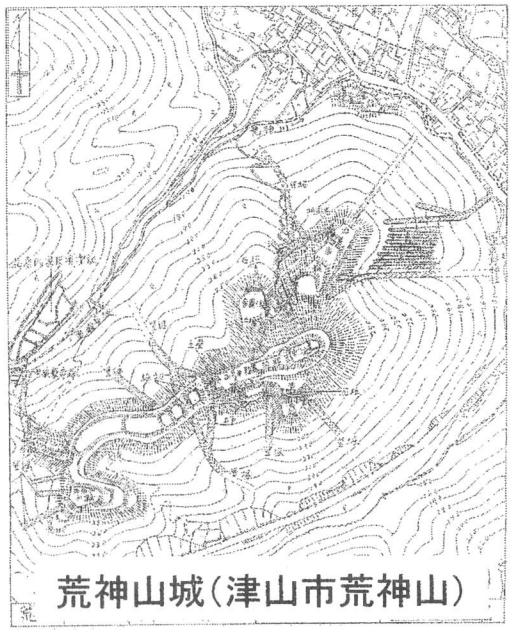
大正11年（愛山文庫）

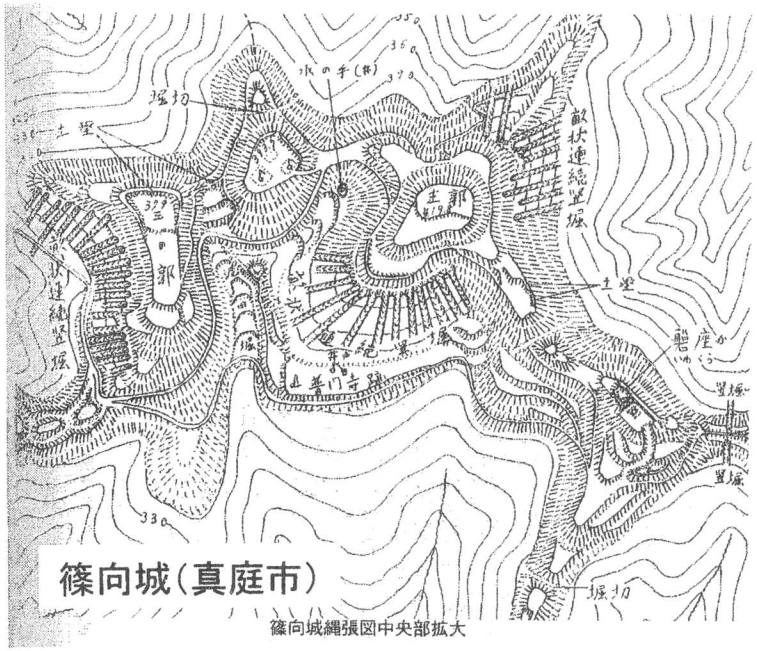
院庄館周辺地名図

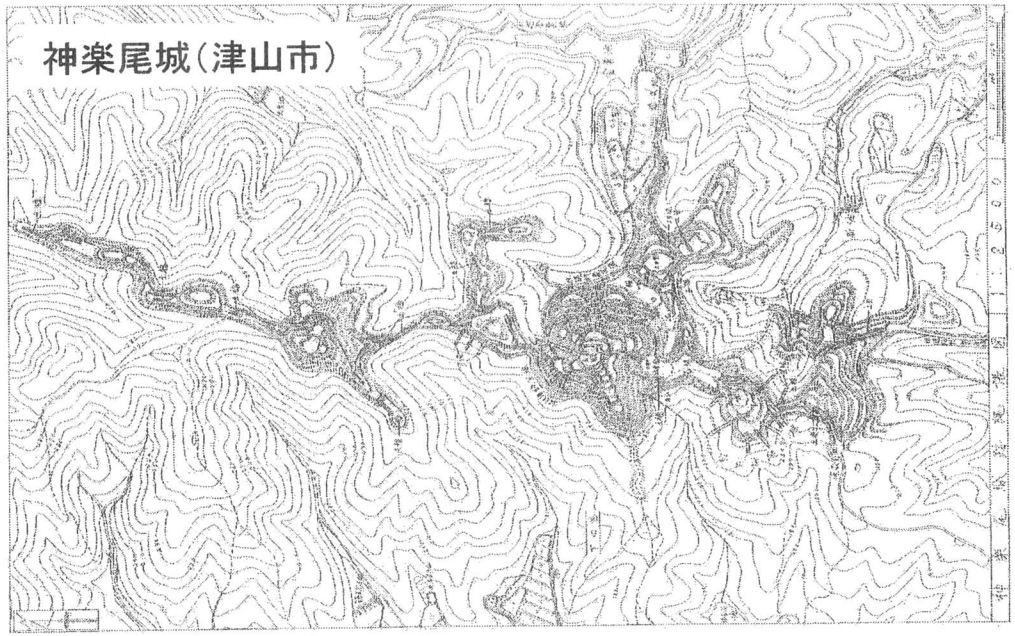
美作地域の山城の縄張り図

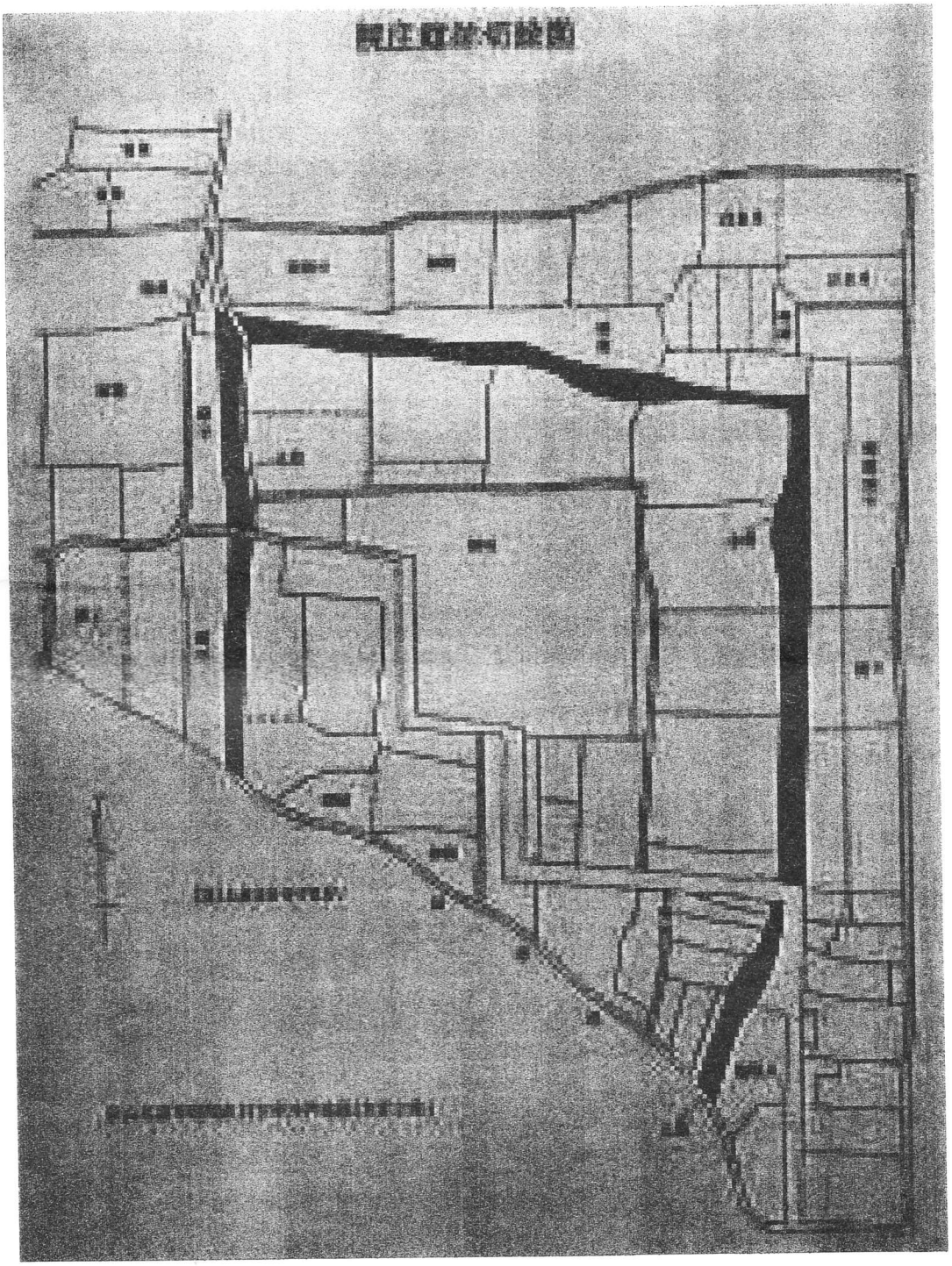
作図　山田省吾氏











院庄館を含む周辺図